

浄土真宗・

お念仏とは

第二回

一、祈りの宗教、目覚めの宗教

宗教は、「祈る」ものだと常識があります。真剣に祈れば問題が解決されるのが宗教で、その対象が神や仏である、そう考えられている方が、多いと思います。

ところが、浄土真宗は祈らない宗教だといわれます。「お願いします」と祈ることをしないのが、お念仏の教えだといわれます。

祈らないで、どうして願いを聞いてもらうのか、願いがかなえられない宗教など、意味がないと考える人も多いことですが、はたして、祈らない宗教を、何故、私の先祖は選んだのか、疑問も出て来ます。浄土真宗は、目覚めの宗教だといわれます。朝、目を覚ますという、

あの目覚めの宗教だと言われます。私たちは、毎日夢中になって生きていますので、ちゃんと目を覚まして、しつかり生きていくようにすが、どうも夢をみているような、夢の中にいるような、ぼんやりとした毎日を過ごしているのではないかと問いかけてです。

忙しさのあまり、自分がどんな生活しているのか、どんな行動をとっているのか、自分中心で、他人を困らせ迷惑をかけていることにも気づかず無頓着で、自身身のことは、よく分からず生きています。

周りの人のことは、良く見えるものの、自分のことが分かっていません。ところが、鏡に自分の姿を写すと自分の目で確かめることができます。

これと同じように、お経には、仏さまの働きを光りに例えて説かれており、ちょうど暗闇の中で、光りに照らされると、自分の置かれている場所や、自分が進む

道が分かるように、教えに出会うことで、自分自身ですこしは見えてくるということです。

そこで、お念仏の光りに照らされる教えは、目覚めの教えと言われます。しかし何故祈らないのか、何故祈らなくてもいいのか、疑問です。

二、おねだりの中味は 私たちが、祈るその内容は、ほとんどの場合、健康になることお金が儲かること、子供や孫の入学試験や就職試験、お店や会社の仕事がうまくいくこと、農作物が豊作であることなどです。

まずは、自分の家族や親しい人の幸せを願っています。自分のことよりも、周りの人のことを思って祈っていますから、自分は、自己中心ではないと思ひ込んでいます。しかし、よくよく考えてみると、私の血縁であったり、私の友人、私の学校、私の応援するチーム、私のことをよく理解してくれる

人など、どれもこれも、私の都合の良い人のことだけを祈っています。

同じ私でも、私にとって都合の悪い人のことは、反対にその人が幸せに成らないことを願っていたりします。

競争が伴うときには、相手を押しのけて、なんとか自分の味方を勝たせたいと祈っています。

これは、小さな子供が自分さえよければ良いと、兄弟も友達も無視して玩具を奪い取って、遊んでいる姿と何ら変わらなように思えます。

こうした子供を見たときに、大人が思うことは、そんなわがままは駄目、みんなが仲良くしなさいというものです。私たちは、小さな子供が玩具を取り、独り占めするのと同じように、自分と自分に関わる人だけのことを考えて、祈っています。

表一番下の欄に続く

たった一言が 人を傷つける たった一言が 人をあたためる

ホームページは「お墓のさんわ」で検索してください。

日出店：速見郡日出町川崎会下(空港道路入口) TEL (0977) 72-6415
 三重店：豊後大野市三重町赤嶺1041(トリアル横) TEL (0974) 22-3301
 森町店：大分市横尾2733-1(大東中学入口) TEL (097) 524-6525



第166号
発行所
さんわグループ
編集 広報部
大分市森町

出遇い

信国先生は、大谷大学のフランス語の先生でしたが、同じくドイツ語の先生だった池山栄吉先生の導きで親鸞聖人の教えに帰入され、晩年には大谷専修学院で若い人たちの指導にあたられて、大きな感化をのこされました。先生のご講義は、八巻の『信国淳選集』に集められています。

先生の書かれたものの中で、とくに感動をよぶのは、「出会い」と題された一文です。先生はそこで「何かにつけ、自分が自分で持ちきれず、自分自身が自分にとって不安であり、ややもすると自分と自分自身との間にずれが生じるので、始終自分自身の前で浮き足立た格好で生きるよりほかなかったその頃に、……私

は不図(ふと)その”人”に出会ったのである」とおっしゃって、ある冬の寒い夜、池山先生と出会われたその出会いを、感激をこめて語られ、そのときに、帰宅後、奥さんに話された言葉を記されています。それはこういう言葉です。

「私は浄土に往く、浄土が何処かにあつて往くというのではない。浄土を思想的に考えたり、観照的に捉えたりして、そこへ往くというのでは毛頭ない。私が浄土へ往くという理由は簡単だ。私は今夜、念仏して浄土に往く人を見て来たんだ。この眼ではっきり見て来たんだ。ただそれだけ。それでもう充分。私はこの人を信じる。だから、私も浄土に往く、とこういふことなんだ、さあ、君はどうするか? 君も私と一緒に往く

か? どうするか? ……

しかし、それは君自身の決定にすべき問題だ。とにかく私は浄土に往く」

ここには、『歎異抄(たんにしよう)』の第二条に、親鸞聖人が東国からやってきた門弟たちに、「たとひ法然聖人にすかされまらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからず候ふ」(註釈版聖典832頁)とおっしゃったお気持と同じお気持が表明されています。善知識(ぜんちしき)に遇うということはこういうことであり、そのお言葉に信順するということもこういうことです。「善知識にあふ」ことをしふることもまたかたしよくきくこともかたければ信ずることもなほかたし(『浄土和讃』同568頁)

と、聖人は和讃にもうたつていらつしやいます。

その善知識の導きによって、初めて私たちは、この世の善悪に対する関心から解放されるのです。「煩惱具足(ぼんのうぐそく)の凡夫(ぼんぷ)、火宅無常の世界は、よろづのこと、みなもつてそらごとたはごと、まことあることなき」(同853〜854頁)というのが人生の実相です。そういう人生に、私たちは、あれがいい、これがわるい、と言つてすがりついているのです。聖人は「善悪の字しりがほは おほそらごとのかたちなり」(『正像末和讃』同622頁)とおっしゃっています。

石田 慶和

(いしだ よしかず)

仁愛大学学長



裏面より続く

そんな祈りが叶えられるとは、とても思いませんし、そんな願いが叶えられたとしたら、本人の為には決して良いことではありません。自分さえ良ければいいという、わがままは許してはいけないと思うのが大人です。神も仏も、大人の目と同じように、そのような勝手な願いを叶えてはくれないと思います。

第二回 目覚めの宗教

終わり

第三回 人間の願い、仏の願い 11月号に続きます。

